



レジナレス・ワールド 2

η L P η η L I G η T

式村比呂

Shikimura Hiron



アルファライト文庫 

主な登場人物

シュネ

穏やかで知性に優れた白竜の娘。とある事情で一族とはぐれてしまう。真の姿は白く巨大な竜。

ザシャ

テイラス教の最高権威である教導長。歳若くして現在の地位まで上りつめた秀才。

ガルドー

おじろ
獣人族の島を根城にする海賊。
ジーベック
高速の海賊船を操り、南洋を荒らし回っている。

シュウ

本編の主人公。
“黒竜殺し”の二つ名を持つ最強剣士。
「世界樹の守護者」となる。

サラ

シュウの幼なじみで共にVR-MMO世界に転生する。
ホーネット
“舞姫”と呼ばれる「聖騎士」。

アリシア

獣人族の族長の娘。
弓や剣の扱いに優れた戦士。
人間の街で情報収集にあたる。

ジルベル

強大な力を誇る銀魔狼。
シュウの窮地を救い仲間になる。人化はお手の物。

「やはり、もうそろそろ限界……ですか」

すると、残った子どもたちもはたはたと倒れ込む。

慈愛の欠片もない冷酷な瞳で、男は幼子たちを見下ろし独りごちた。

外に運び出していく。

さつと男が手を振る。

男の音が、扉の外の番に届いた。

番の指示で駆けつけた粗野な男どもが、尻込みしながらも、横たわる多数の子どもを室内に運び出していく。

「倒れた者を運び出さない」

男の音が、扉の外の番に届いた。

薄暗い地下室の中で、屹立つ四柱の鍾乳石に両手を添えている十人近い少年少女。彼らの目には、誰一人意志の光が宿っていない。

1





「……さすがに白竜の食欲は違うわね」

シユネを見つめながら、呆れたようにサラが呟いた。

メイド長のカタジーナが次々と並べていく料理を、嬉しそうに眺めるシユネ。そんな彼女を見ているだけで、サラはお腹一杯になってしまったのだ。

「う……ねえシユネ、よかつたら私の分も食べてくれない？」

「はい！」

元氣よく答えるシユネの目がきらきら輝く。サラはため息をついて、前日のことを思い返した。

『竜の巢』において、世界樹ユーガの新たな森の創造を見届けたシユウたちは、昨夜、聖都レオナレルの自宅に戻ってきた。

そして、シユウとサラ、ジルベル、シユネの四人は、遅い夕食を取ることになった。

料理人たちが「オーナー様への日頃の恩を返す」とばかりに張り込み、シユウやサラに

とってはとても食べきれないような量のごちそうが、これでもかと振る舞われたのである。やっとの思いで完食した二人に対し、ジルベルとシユネの聖獣コンビは健啖ぶりを発揮し、その細い体のどこに入るのかと訝しく思うほどの量を食べ尽くした。

夜が明けてもまだ胃もたれしているシユウたちをよそに、ジルベルたちは今朝もけろつとした顔で、朝ご飯を楽しみに待っていた。

さすがに昨日の今日で、香ばしいバターとチーズがたっぷり盛られたハムトーストは厳しい。結局サラは、サラダと果物のジュースだけで朝食を済ませた。

シユウもトーストを一枚だけ頑張つて食べると、残りをすべてシユネたちの供物としてささげる。食欲旺盛だと自任していたシユウでさえこの有り様だった。

彼女らが喜んでくれるのは嬉しいが、今後の食費も心配になってくる。

「おしとやかな割によく食べるわねー」

テーブル上のすべての料理を綺麗に片付けたあげく、物欲しそうにカタジーナを見つめてまんまとお替わりをせしめたシユネに対し、サラが頬杖をつきながらぼやいた。

「……もしかして、何か札を失ってしまいましたでしょうか？」

シユネがしゅんとしたので、慌ててサラは微笑んだ。

「ううん、ごめんごめん、そうじゃないのよ」

「気にすることないよ。ジルベルの食べる量もすごいから、シユネも当然だよね」

そう取りなすシユウにサラも同意する。

「まあ……確かに元々の体の大きさ考えたら、ねえ」

「とにかく、よく食べることは悪いことじゃないから、これからも遠慮しないでいいよ」

シユウの言葉に安心してにっこりしたシユネの笑顔が、サラにはまぶしかつた。

「ところで、今日はどうするの？」

食後のお茶を飲み、やっと少し落ち着いたところでサラがシユウに聞いた。

「うん、それなんだけど……僕とシユネでノイスバイン王国に行つて、竜に関する情報収集をしてよいかと思うんだ。その間、サラにはレオナレルで調べ物をしてもらいたいんだけど、いいかな？」

サラの顔がむむつと不満げにふくらむ。

「な、なら、サラとシユネでノイスバイン、僕がレオナレルで調べ物でもいいけど」

「……なんでノイスバインなの？」

「うん、ちよつとね」

身支度みじたくのためいったん解散し、二人きりになった時、シユウはサラに事情を話すことにした。

「シユネにとつてはさ、やつぱり一族の安否あんぴが気になるでしょ？ だつたらここでじつと

しているより、彼女には少しでも体を動かしてもらつていた方が、気が紛まぎれると思うんだよね」

「……ふーん、なるほど」

それはサラも何となくわかる。

「で、まあ、ノイスバインだつたら僕らにとつて……ほら、情報源があるじゃない？」

「王様？」

「いやあ、王様はさすがにあれだけど、騎士団の人たちとかさ」

「ああ、そうね」

「でも、レオナレルも情報が集まりやすい街だし……と言うか、この大陸じゃかなり情報が豊富な場所なんじゃないかな？ だからここでも調査した方が……」

レジナレス大陸の中央部にあり、政治と文化の中心地であるレオナレルは、全大陸からの観光・商業客が引きも切らず訪れる。北部の大商都エベルバッヒには劣おとるものの、自然と様々な大陸の噂話うわさばなしが、商業ギルドや冒険ギルドなどに集まってくるのだ。

「ノイスバインに行くならシユネに運んで欲しいから、ここに残るのは僕かサラのどっちかでしょ？」

「……わかったわよ。シユウ君はどっちがいいの？」

「うん。今のところ、レオナレルにはラルスもないから商売の話もないし、こっちに残るよりはノイスバインに行きたいかな？」

「シユネと二人つきりっていうのが心配だけど……」

「いや、シユネだって白竜だし、安全面でも大丈夫でしょ」

——ばか、心配なのはシユネも女の子だからに決まってるでしょ！

サラはまたちよつと、ふくれっ面になる。

が、まあ確かにシユウの言うとおりだろう。やむなくサラも同意した。

「じゃ、私がこっちに残るね」

「うん。よろしく……そう言えば、今朝なんか変な夢を見たんだよねー」

シユウがふと思いついたように言うと、意外なことにサラは「私も」と応じた。

「へえ、本当？　どんな夢？」

「あのね……ほら、この世界に来て一番最初に会った、あの光の玉みたいなのが出てきて『この世界にお前たちがいる理由が知りたければ、あのダークエルフを探し出せ』とか

言って消えたの……って、シユウ君どうしたの!？」

シユウの表情がこわばったのを見て、サラはびつくりして聞き返した。

「……僕も全く同じ夢を見たんだ。あの光の玉、『この世界に出られないから夢で話しかけた』って言ってなかった？」

「同じ夢!?　不思議だね。細かい話は覚えてないけど、それまで見てた夢がぼつさり終わって急に、って感じだったよ」

「僕もそう。二人で同じ夢を見たということは、これ、偶然じゃないかもしれないな」

シユウは腕を組んで考え込む。

「……僕らがあいつと出くわしたのって、シユネを助けた時だったよね？　もし何か目的があつて白竜を襲ったんだったら、シユネの家族たちが行方不明なのとも関係あるんじゃないかな」

「うん。ということは、シユネの家族を探していれば、いつか出会いそうよね？」

サラもうなずく。

「まあ、他に手がかりもないし……でも『僕たちがこの世界にいる理由』なんて本当にあるのかな」

「そうだね……ダークエルフに会えば、それがわかるのかも」

「うん。なぜそれを知ってるのかも含めて、問い詰めてやろう。もちろんシユネに謝罪させるのが最初だけだね」

シユウとサラがこの世界に連れてこられた理由、そしてあの光の玉が語った「君たちは事故にあった」という不気味な言葉。シユウたちを襲った一連の出来事の鍵を、例のダークエルフが握っているらしい。

必ず見つけ出そう——二人はそう確認して、それぞれの部屋に戻っていった。

ノイスバインの王都、バインスタイン。

ここは、シユウとサラがVR・MMO『レジナレス・ワールド』と酷似した異世界に来て、最初に訪れた大都市だった。

長い歴史と伝統のある城郭都市で、現王はエガルド・サリガル・アデラル・ノイスバインという。

この世界に閉じ込められてまだ日の浅かったシユウたちに対し、多大な厚意と一種の保護である手形を与えてくれたのが彼だった。

竜となりシユウを乗せ飛翔してきたシユネは、城郭都市の外縁まで来ると、そこにこつそりと降り立った。そして、人の姿に変わり、シユウと共に街道を歩いて城門まで向かう。

城門の衛士に国王直々に発行してもらった例の手形を見せると、最敬礼で出迎えられた。シユウは彼らに騎士団長アルノルへの取次を依頼し、衛士詰め所前のベンチで、行きかう人々の様子をぼんやり眺めていた。

うらかな陽気の中、人々がのどかに荷を運んだり、街角で談笑したりしている。

豊かさと治安の良さがありありとわかる光景に、シユウは改めて、ノイスバイン国の善政を見た気がした。

「シユウ殿、お久しぶりでございます」

駆けつけたアルノルが騎乗のまま礼を取ってから、馬を下りた。

「アルノルさん、忙しいのにお呼び立てしちゃってすいません」

「いえ、実はこちらにもシユウ殿がいらしたらご相談したいことがあります……ちょうど良いところでした」

「そうなんですか。なんの用です?」

「まあまあ、まずはお城までお越しく下さい。馬車を用意させております」

乗り込んだ馬車に揺られ、やがて懐かしい騎士団の官舎に到着すると、早速国王が微行で出迎えてくれた。

「これは、シユウ殿」

「ご無沙汰してます。王様」

シユウの恐縮する気持ちを察したのだろう。ノイスバインのエガルド王は、自らシユウの肩を叩き、「まあお掛けなさい」と、控え室の席に二人を誘った。

「アルノルさんから、僕に用件があると聞きましたか？」

シユウが尋ねる。

「うむ。まずは、以前シユウ殿が退治した、サステオの北に菓食うオーガの件だ」

かつてサステオの北に位置する廃村で、二十五体ほどのオーガを倒し、その経緯をサステオの守衛に届け出したことがあった。

王が言うには、その退治の褒賞と魔石の買い取りを併せて、金貨五十枚を進呈したい、ということだった。遠慮するのも無礼だと思い、シユウはありがたくその金貨を受け取る。

次に、すでに噂がここまで届いているシユウ商会とホテル・レオナレルに話は移った。

「シユウ殿、そなたは我が国でも商いをするつもりはないか？」

城へと続く目抜き通りの一角に、歴史あるホテルが一軒立っている。そのホテルは王族の所有物だが、シユウ商会に譲っても良い、というのだ。

ノイスバインにとっても、シユウたちと誼を通じておくことは、今後の益になると見越

してのことらしい。

「ありがとうございます。商会の責任者をこちらに外向かせて、お話を伺いたいです
すね」

鉦山街ラドムで陣頭指揮を執っているラルスには悪いが、バインスタインで商売を始めるのなら、彼にいろいろ見立ててもらわなければならない。

シユウの仲間で、現在もっとも忙しいのは間違いない彼なのだが……。

「時に、シユウ殿。こたびは何用で我が国に？」

「はい、実は……」

シユウはしばらく悩んでから、正直に、自身が世界樹の守護者になったこと、シユネの身の上などを、王とアルノルに話して聞かせることにした。

シユウたちに当初から好意的だったエガルド王は、理知的な人柄でもあり、知られても大丈夫ではないかと期待しての決断だった。

「なんと……」

王とアルノルは、シユウが口にした内容のあまりの壮大さにしばらく絶句する。

「ではそなたらは、守護者たるエルフとなられたのか？」

「いえ、違います。ただ……そんな感じはしませんが、世界樹の祝福らしきものは受けているみたいですよ」

「いやこれは……ご無礼を」

王は椅子から立ち上がると、右膝を床に突き、右手を胸に当てて最敬礼の姿勢を取った。「やめてください、そんなこと！」

「しかし、世界樹の守護者ともなれば……」

シユウは慌てて王の手を取り、席に戻ってもらってから告げた。

「すみません。身勝手ですけどこの話、今ここにいる人たちの中だけに、とどめておいていただけませんか？」

「し、しかし……」

「僕は一つの場所で、世界樹の森で、じっとしていることはまだ出来ないんです。そして、世界樹の守護者である事実が知れると旅がしにくくなりますし、いろいろ騒がしくなりそうで困ります」

シユウは、シユネの一族である行方不明の白竜探しをせねばならないことや、その情報集めのためにここに来たことなどを説明した。

「なるほど……わかりました。シユネ様のお身内の件、騎士団にて調査いたします」

アルノルは緊張した面持ちながらも、氣丈に請け負ってくれた。

「僕はあなたから、とても深いご厚意をいただきました。だから、嘘偽りなしに本当のことをお話ししたんです。その上でお願いします」

シユウは、国王の手を取ったまま続ける。

「どうか、今まで通り、一介の冒険者として扱っていただけませんか？」

「……わかった、シユウ殿」

国王は、にやっと笑い、これまで通りの口調で答えた。

「それと、もう一つお願いがあります」

「なんだね？」

「先ほども言いましたが、僕はシユネの背に乗って旅をしています。そこでノイスバインに来た時、王城の庭に着陸する許可が欲しいんです」

「それは……？」

「今は、城郭の外に下りてから、そっと街に入っています。さすがに魔法で姿を隠していますが、いつか誰かに見つかるかも知れません。王城の中に直接下りられれば、そうした危険も減らせるかな……と」

「わかった。騎士団の庭あたりに降下し、この施設を自由に使えばよいだろう」

「本当ですか？ 何から何まで、お世話になります」

シユウが頭を下げると、国王は慌てて、シユウの手を強く握り返して言った。

「なんの。それよりシユウ殿、今宵はじっくり、そなたらの冒険譚をお話しいただくぞ！」

王城に泊まれという国王の誘いを断れなかったシユウたちは、豪華な宮廷料理を堪能したあとも夜半まで引き留められ、旅の話をしていた。

その中で、ラドムに新しい都市を造るという話題になると、国王もいずれ何らかの援助をする約束してくれた。

「シユウ殿」

「はい」

「ラドムだが、出来る限り他国の影響力を排し、独立都市とした方が良い。貴殿が、いや、そなたが世界樹の守護者であると知られば、世界中の権力者がその力を欲するであろう。正直、余も……」

「王様？」

「いやいや、これは失礼。ともかく、余の知る限り、この世でエルフ以外が守護者になつたというのは、ユガリス教の始祖、聖賢ユガリス様を除けばそなたが初めてだと思っ」

かつて、エルフと人間との戦争を引き起こす原因ともなった、その「力」への渴望のことを言っているのだろう。

ちなみに、ユガリス教とはレジナレス大陸最大の宗教である。

「だからこそ」と王は続ける。

「シユウ殿が真実を打ち明けてくれたことを余は誇りに思う。余もこの事実を秘匿し、そなたの旅を手助けしたいと思う」

「ありがとうございます」

「我が君、そろそろ……」

アルノルが王を促し、この夜の密談は終わった。

シユウにとつて、心沸き立つようなひと時だったことは言うまでもない。

翌日、シユウとシユネには遅めの朝食が振る舞われた。

しばらくするとアルノルが現れ、「謁見の間にお越しただけませんか？」と告げる。

「例の、王城に自由に立ち入る一件で、我が君に考えがございます」

「わかりました……あの、シユネも一緒の方がいいでしょうか？」

シユウが聞くと、アルノルも一瞬考えてから答えた。

「はい、シユネ様も一緒によろしいでしょう」

「良く来た、シユウ殿」

謁見の間に着いたシユウたちに向かい、昨夜の密談などなかったかのごとく、エガルド王はすまして言う。だが、その悪戯いたづらっぽい瞳はきらきらと輝き、笑っているようだった。

「お久しぶりです」

シユウは、以前のように立礼りつれいを以て答える。

今回は、その場の重臣たちからの非難ひなんめいたざわめきはなかった。

「レリウ、ライダン、そしてサステオにて、そなたの退治した魔物どもは、これまで我が国にとって計り知れぬほどの脅威きょうゐであった。まずは礼を言う」

「ありがとうございます」

「聞けばそなた、我が騎士団とも昵懇じつこんで、特にアルノルと深く友誼ゆうぎを結んでおるとか」

「はい。親しくさせてもらっています」

「そこで、だ」

王は一瞬間を取ると、芝居しばいがかった仕草しぐさで後ろを振り返った。

傍らかたわらに控えていた老侍従じしやうが、トレイのようなものに載せた金属片くわんじゆを、恭しく王の前に捧げる。

「そなたに、我が城への自由な往来おうらいを差し許す。シユウ殿、これへ」

「はい」

シユウが進み出ると、王は玉座ぎよくざを立ち、シユウの元へ歩み寄って、その金属片——紋章もんしやうを手渡した。

受け取ったシユウは、元の位置へ下がる。

「その必要もはやなからうが、詮議せんぎの際はこの紋章を見せるが良い」

「ありがとうございます」

事前にアルノルから聞いていた通りの受け答えを済ませると、無事に紋章授与式は終わった。

その紋章は、王国に多大な貢献こうけんをした者に贈られる、栄誉えいよあるものらしい。王家の紋である城、獅子しし、竜、旗をかたどったもので、アルノルがそれをシユウの左胸に取り付ける。

「これにて謁見を終了する」

エガルド王がそう宣言し、シユウたちは退席した。

竜の目撃談などの調査を騎士団が引き受けてくれることになったため、シユウはシユネ

と共に、ラドムのラルスを迎えに行くことにした。

その途中、立ち寄ったレオナレルの邸宅で夕食を取りながら、シユウはサラに、ノイスバインでの出来事を報告していた。

「いいなあ……」

「なにが？」

「私もアルノルさんや王様に会いたかった」

「またすぐ行く機会もあるよ。サラが顔を見れば、アルノルさんも喜ぶと思うし」

「うん」

サラは残念そうにうなずくと、自分の現況を伝えた。

「そうそう、こっちの調査は商業ギルドと工芸ギルド、あと冒険者ギルドなんかをお願いしてるよ。まだこれだつて話はないけど、噂話レベルだと、ネッカーブングルの方になにかあるみたい」

ネッカーブングルというのは、レジナレス大陸の南西に位置する王国だ。シユウがまだゲームだったレジナレス・ワールドで、最初に目指した国でもある。

「なにかあって？」

「うん。あのへんの山に、魔物がひしめく迷宮——ダンジョンが突然現れた、っていう話があるんだって」

「……ダンジョンか」

シユネと出会った時のことを思い出すシユウ。

魔泉が魔物を生む元凶だと考えれば、ダンジョンには必ず魔泉があるはずだ。それが突如出現したとなれば、あのダークエルフが関わっている可能性も高い。

もしかしたら、その最奥には黒竜が潜んでいるかもしれない。

「とりあえず、もう少し詳しい情報を集めてみて」

「うん、わかった」

サラはシユウとシユネを交互に見てから、少し寂しそうに答えた。

翌日、シユウは竜化したシユネに乗ってラドムに向かい、ラルスにノイスバインでのホテルの件を相談した。

ラルスは、部下の中でもとりわけ信頼を寄せているフォルカーにラドムの後事を任せ、シユウたちに同道し、ノイスバインへ出立した。

「まさか、エベルバッヒとの往復がたった六日で……」

三日後、突然現れたシユウたちを前にしてアルノルがうめく。
ラドムにほど近い自由商業都市のエベルバッヒは大陸北部にある。

バインスタインから海路でも一ヶ月近く、陸路だと二ヶ月近く。この世界の常識では大旅行に等しいその距離を、目の前の一行は空路でやってきたと言う。

ちなみにレジナレス大陸の住人は、聖都レオナレルから見ても都市がどこにあるかでおおよその方角を判断する。バインスタインなら南東、エベルバッヒは北、である。

アルノルは前に一度見たことがあるので、シユネの白竜の姿にも動じなかったが、たまま居合わせた騎士団員たちは、その気高い威容を前にして呆気にとられていた。話に聞くのと実際に目の当たりにするのは大違いだ。

「こちらにどうぞ」

けろっとしたシユウとシユネに対し、空旅の恐怖で明らかに悄然としているラルス。

彼を気遣い、アルノルは一同を官舎に招いた。

「アルノルさん。彼がラルス——シユウ商会の責任者です。ラルス、この方がノイスバイン騎士団長のアルノルさん」

「はじめまして。主がお世話になっております」

ぐったりしていた姿勢をさっと正したラルスを見て、さすがは場数を踏んでいる紳士だ

と感心するシユウ。

「あ、ラルス、こちらにいるのが……」

「余はエガルド・サリガル・アデラル・ノイスバイン。国王じゃ」

「……！」

これにはラルスも慌てて右膝を床に突け、最敬礼をする。

「よい、微行じや」

あいかわらず悪戯っぽい顔をしながら、国王が笑った。

「お初にお目にかかります。主よりシユウ商会の運営を任されております、ラルスと申します」

「ホテルの一件については、このラルスに全権を委ねますので、よろしくお願いします」

「承知した。シユウ殿はどうする？」

「そうですね……ここのところ忙しかったので少しゆっくりしたいです。シユネと二人で王都を歩いてきてもいいですか？」

「案内は必要か？」

「いえ、大丈夫です。それよりその、噂のホテルに泊まってみたいんですが……」

「うむ。アルノル、手配せよ」

という訳で、早速シユウとシユネはぶらりと城を出て、市街の散策を始めた。サラが見れば「デートだ！」と言って、また不機嫌になったに違いない。

シユネにとっては初めて体験する都だった。物珍しそうにしている彼女に語りかけるシユウ。

「こういう街、来たことないの？」

「ええ、私は人間の世界に出たことはありませんでした」

白竜の中には人里を遊び歩く個体もいるようだが、族長の娘だったシユネは、常に『竜の巢』付近に留まり、箱入り娘のように育てられたらしい。

「そっか……今まで案内できなくてごめんね」

右に左に忙しくて、レオナレルでもここでも、観光らしい観光が出来なかったことをシユウは詫びた。

「じゃあ今日は、たっぷり遊んでみようか？」

「はい！」

シユウでさえドキッとさせられる明るい笑顔で、シユネは大きくうなずいた。

ドレスを見たり宝石類を見たりしながら目抜き通りを気ままにぶらつき、昼はホテルで

昼食を取る。

凄まじい量の注文に目を白黒させながら、ボーイがシユウたちの部屋まで料理を運んできた。

ざっと五人前はあろうかという料理が、みるみるシユネの胃袋に消えていく。

「おいしい?」

「はい！」

シユネはやはりと言うべきか、肉料理が大好物だった。

誰かが食事をたくさん、おいしそうに食べるのを見ているのはなぜか楽しい。

シユウもこの日はつられて、いつもよりたくさん食べた。たった二人の食事代がとんでもない額になったのは言うまでもない。

食後は路地裏を中心に散策することにした。

シユネは、公園で遊ぶ小さな子どもたちを、目を細めながらじつと眺めている。

「シユネは子どもが好きなの?」

「いえ、私もいつかあのような子どもを、シユウさまと育てられるのかと考えておりました」

シユネはこの時、シユウが戸惑うほどに妖艶な女の顔をしていた。

「ねえ、シユネ」

「はい」

「そのことなんだけど……」

シユウは、シユネの目をまっすぐ見つめて切り出す。

「僕とサラが、こことは違う——別の世界から来たっていうのは話したよね？」

「は、はい」

シユネは話の意図がわからず、困惑した表情になる。

「僕たちがいた世界だと、普通、男と女は一对一で夫婦になる」

「はい、伺っております」

「だからさ。サラは、ジルベルやクリステルのことも、認めていないんだよ」

「……」

「もちろん、君のこともね」

シユネの顔から笑みが消えた。

「いや、もちろん仲間として頼っているし、そういう意味での好意はちゃんと持つてるんだよ？」

——だけど、一人の女としてはそうじゃない。

「君たちは……ライバルとでも言えればいいのかな？」

人ごとのようにシユウは言う。シユネの胸が一瞬、ちくりと痛んだ。

「僕はね」

シユネの手を取って、シユウは続ける。

「サラも、ジルベルも、クリステルも、君も、本当に大事な仲間だし、家族だと思ってる。もちろんザファイアもね」

「家族……?」

「うん。僕たちは、皆で戦って、助け合って、支え合っている。ユーガを護まもったり、冒険をしながら」

「……」

「君が僕に好意を持ってくれていることはとても嬉しいけど、僕はまだ、誰か一人の女性を選んで愛することは出来ないんだ」

「……サラさまがおられるからですか？」

「それだけじゃない。僕はまだ、この世界に根を生はやして暮らしているだけの『力』を、持っていない気がするんだ」

シユネは首を傾かげた。

シユウはすでに世界樹の守護者として、絶対的とも言える力を有している。その彼を支えるサラやジルベル、クリステルなども、精霊王の加護を得た常識外れの存在だ。

シユネ自身も白竜として、この世界では並び立つ者がいないほどの力を備え、今、シユウと共にある。

魔泉に汚染された自分の命を救い、誇りを取り戻してくれたシユウ。彼の命の輝きにすっかり魅了され、虜になつていると言つていい。

「それはどういうことでしょうか？ シユウさまは、おそらくこの世の誰にも負けませんし、私たちが付いております」

「うん、そうかもね……」

言葉を一度句切つて、大きく息を吸つてからシユウは告げた。

「シユネ。僕たちはさ、これからまだずいぶん長い時を生きていくでしょ？」

「はい」

「だから、もう少し、長い目で見てくれないかな？」

「長い目？」

「うん。そりゃ僕だつて男だし、これだけの女性たちから好意を寄せられれば、やっぱり嬉しいよ。でもね……それよりもまず、今のこの『家族』を壊したくないんだ」

シユネはしばらく、何かを考えるように視線を宙に漂わせていたが、やがてシユウと向き合つてこう問いかけた。

「シユウさまは、それが理由でどなたとも関係を結ぼうとされなかったのですか？」

「うん……て、え？ な、なんで知つてるの!？」

「それは、私も女でございますから」

シユネにやっと、笑顔が戻つた。

「承知いたしました、シユウさま。私も、今しばらくは、皆様と女を競うような真似はいたしません。その代わり、いずれ時が来ましたら……」

「僕も覚悟を決めるよ」

「はい！ お待ち申し上げております」

ほつと、シユウの顔から緊張が消える。

シユウにとつて、これまでなんとなく曖昧にしてきたシユネへの思いをきちんと伝えられたことは、この旅の一つの大きな収穫になった。

翌日、シユウ、シユネ、ラルスの三人は王城に入り、騎士団官舎でエガルド王とアルノルに謁見していた。

「すみません、シユウ殿。王国中に騎士団を遣わせましたが、大した情報は得られませんでした」

「いえ、ご協力ありがとうございます、アルノルさん。ところで、ネッカーブングル王国の迷宮については、何かお聞きになりましたか？」

「ああ……」

アルノルは何か思い至ったように言葉を継いだ。

「詳しくは存じませんが、なにやらブンフハルムという田舎町の山中に大穴が開き、そこから大量の魔物が湧いて出ているとのことですよ」

南から来る船乗りたちの噂では、冒険者やネッカーブングルの国軍兵が、こぞつてその村を目指していると言う。

「ですが、我が国とはさほど縁のない国です。それ以上のことは残念ながら……」

「それで十分です」

「シユウ殿、よろしいか」

ここで国王が口を挟んできた。

「はい、何でしょう？」

「例のホテルについては、余の方から商業ギルドに指示し、シユウ商会の所有と登記変更

させることとした。その後のことはラルス殿に任せるが、よいか？」

「ありがとうございます」

「うむ。それが終わったら、我が国の視察団を、内々でラドムに遣わせたいと思う。それについても、ラルス殿と協議させてもらうが？」

「ラルス、それでいい？」

「お任せください」

「では、すべてその流れでお願いします。何から何まで、お世話になります」

シユウはそう答えながら、国王に向かって頭を下げた。

「なんの。ところでシユウ殿。いずれ機会があれば、余もシユネ様の背に乗せてくれぬか？」

「僭越ながら陛下！ そればかりは、お止しになりますよう」

ラルスが青い顔で告げる。心なしか声も震えているようだ。

「それほど怖いか？」

「そ……それは」

ちらっとラルスはシユネを見やる。

堪えきれず、シユウが声を上げて笑い出した。

「まあ、いずれ機会があればお頼みしたい。その時はお願いしませんが、シユネ様」
どこまで本気かわからないが、国王はそう言うとしユネに最敬礼してみせる。
思わず顔を見合わせて苦笑いするシユウとシユネだった。

シユウたちはラルスを送るついでに、商都エベルバッヒで情報収集中だったジルベルとクリステルを迎えに行った。そして翌日、久しぶりに一同が、レオナレルの邸宅で顔をそろえた。

「やつぱりネッカーブンゲルに行くべきかな？」

エベルバッヒにおけるクリステルの調査でも、めばしい情報はなかった。

一方、サラがレオナレルで得た情報からは、より詳しくネッカーブンゲルの迷宮について知ることが出来た。

四ヶ月ほど前に大きな地震があつて、ブンフハルム村の北面に位置する山に大きな洞窟が出現した。そこから魔獣が湧くようになったのが二ヶ月前のことらしい。

村の働き手である男たちに多大な被害を出しながらも、最初の襲撃は何とか防ぎきった。その後、急報を受けネッカーブンゲルの国軍兵が防衛に当たっていたが、噂を聞きつけた冒険者などが徐々に集まり始め、今では、宿屋が建設されたり、ギルドが開設されたり、

行商人がたむろしたりと、活況を呈しているようだ。

「もう一回皆でバインスタインにいつて、騎士団の調査を聞いてみようか？ それで竜について情報が得られないなら、ネッカーブンゲルに行こう」

しばらく議論した後、シユウがそう会話をまとめた。

「なぜザフィアを連れて行かない！」

黙つていればまだ二十代でも通りそうな美貌に、珍しく色をなしてカトヤは言った。

こんな外見をしていながら、シユウが知るだけでも二、三人の子持ち——しかも五人以上孫がいるのだから、エルフという種族は恐ろしい。

シユウたち一行は、行方知れずになっているシユネの仲間の白竜を探す旅に出ることを、ネクアーエルト大森林にあるハイエルフの里まで報告に来ていた。

クリステル、ザフィア姉弟の外祖母であるカトヤは、さも当然という口調で、ザフィアも連れて行くのだろうと確認した。

しかしシユウは口ごもった。

正直なところ、ザフィアのリーダーシップは、急ピッチで進められる『竜の巣』における新しい里作りに欠かせない。

しかも彼は、四大精霊王の石柱ノームと直接契約をするという、近年まれに見る高い才能を有している。世界樹の守護者であるシユウと共に、新たな世界樹の聖地を創造したザファイアには、エルフたちから老若男女問わず深い尊敬が集まっている。それはもはや崇拜に近いかもしれない。

そのザファイアの同行に難色を示したシユウを見て、カトヤは機嫌を損ねたのだ。

こうして感情をあらわにすると、さすがに生きてきた年数の違いがわかる。シユウはたじたじとなつてしまった。

「でもカトヤさん……」

サラが口を挟もうとするのを、じろりと一瞥しただけで黙らせるカトヤ。

「……シユウ殿、ザファイアに至らぬ点でもありましたかの？」

やや口調を穏やかなものに戻し、カトヤはシユウに尋ねた。

「と、とんでもない、逆ですよ」

シユウは慌てて否定する。

「ザファイアはすごく頑張ってくれています。『竜の巢』の里作りから彼を引き抜いたら、あつちに支障が出るんじゃないかって思ってるんです」

まるで叱られてしている子どものような心境だ。返答が言い訳がましい口調になっていない

かと、シユウはひやりとした。

「ではこうしましょう。私が里作りの役を引き受けます。だから、シユウ殿はザファイアを連れてお行きなさい」

「……」

どうしてカトヤがここまで強く主張するのかを疑問に思うシユウ。

そう言えば、カトヤはつい最近までエルフたちから白眼視され、仲間として扱われていなかった。

とつさにそれが原因と考えたシユウは、顔を曇らせてしまう。

「もう大丈夫じゃ」

シユウの心の動きに気付いたのか、カトヤは表情を緩めた。

同席していたネクアーエルツの首長であるガイドも彼女に賛同する。

「シユウ殿。世界樹の守護者の傍らには四大精霊王の加護がある方がよいと、僕も思います」

カトヤの気持ちを代弁し、ガイドが言った。

「それに、ザファイアはまだ経験が浅い。修業も足りんですしの。どうかお連れください」
ガイドにまで頭を下げられたので、シユウはその手を取って了解の意志を示した。

正直、ザフィアの戦闘力は魅力的だ。彼が一緒なら、望んで来てくれるなら、それほど心強いことはない。

数日後、『竜の巣』の森で励んでいるザフィアの元に、カトヤを含めた一行が到着した。カトヤからシユウに同行するように命じられると、一瞬ザフィアは不満げな表情になる。彼も彼なりに、この任務にやりがいと責任感を持つていたのだろう。

だがそこで、またあの恐ろしいカトヤの表情がよみがえり、ザフィアを睨みつけた。今度は自分が対象でない分、シユウはちよつと気が楽だ。

「……すごい迫力。さすがに年の功よね」

シユウに小声でささやくサラ。しかしその声は、しつかりカトヤに届いたらしい。

カトヤがひと目サラを睨むと、それだけでサラは硬直してしまった。

「ザフィア、お前は何を成す者だ？」

「……世界樹の守護者たらんとしています」

「たわけが！」

カトヤが怒鳴りつける。

「世界樹の守護者はシユウ殿ただお一人じゃ。お前はそのシユウ殿に従い、護り、武器と

なり盾となる者じゃ。心得違いをするでない」

凄まじい剣幕だった。

「よいか、ザフィア。クリステルもじゃ。お前らは世界樹の種をその身に抱かず、世界樹と魂もつながっておらぬ。世界樹を護りたいと願う精霊王たちの恩恵を、ありがたくもいただいているに過ぎんのじゃ。それをゆめゆめ忘れるでないぞ」

その後、カトヤは二人きりでザフィアと話し、彼を納得させたらしい。

出立の時、カトヤは村の入り口まで見送りに来てくれた。

「じゃあ、あとはお任せしますね」

「心得た」

快く返答したカトヤは、クリスとザフィアの二人の孫に向き直り、「しつかり努めるがよい」と優しく微笑みかけた。

「で、今から何をどうするんだ？」

ザフィアがシユネの背によじ登りながら、シユウに聞いた。まだ少しふくれっ面だ。

「うん、まずはノイスバイン王国に行つて、情報収集かな？　そこで何もないうだつたら、ネッカーブンゲルに向かおうと思う」

シユウが口にした行き先は、どちらもザフィアの知らない国らしい。

確かにこういった点が、ハイエルフとしてネクアーエルツでのみ過ごしてきたザファイアの「経験が足りん」ところなのかもしれないなと、シユウは妙に納得した。

ノイスバイン城に降り立ったシユウたちは、その足で騎士団の官舎に入った。

「やあシユウさま、いらつしやい。」

アルノルの扈從であるガルがめざとく一行を見つけ、愛らしい笑顔で駆け寄ってくる。

彼は、シユウとアルノルが初めて会った際にも同行していた一人で、年も近いので妙にシユウに懐いてくれていた。

「やあガル。アルノルさんは？」

「団長は下町に行ってます」

「へえー、珍しいね」

「なに言ってるんですか！ シユウさまのために、聞き込みに回られてるんですよ？」

どうやら律儀にも、団長自らが足を棒にして、竜の噂を調べてくれてるらしい。

「ごめんごめん。じゃあ悪いけど待たせてもらっていいかな？ ああそうだ、今日はいつよりもメンバーが多いから、紹介しておくよ」

シユウは、既に顔見知りのサラとシユネの他に、ジルベル、クリステル、ザファイアと順

に紹介した。

エルフと接したことがないガルは、クリステルとザファイアのあまりの美しさに魂を抜かれたような表情になった。

やがて我に返ると赤面し、年若いながらも騎士団員らしい礼式で全員に挨拶をする。

アルノルがノイスバイン城内の近衛騎士団官舎に戻ってきたのは、夕刻のことだった。

訓練や巡察を終えた団員のうち、家庭を持たぬ者は、この官舎の東にある宿舎で生活しているが、風呂や食事は官舎で済ませる。

だからこの時間は何かとざわめくことが多いのだが、今日は、建物全体が浮いているような気配をアルノルは感じた。

「今帰った。なんの騒ぎだ？」

「は、お帰りなさいませ。シユウ殿とサラ殿が、お仲間を連れてお越しです」

官舎の門前に立つのは、年若い団員の務めだ。官舎は城内にあって治安に問題がないので、警備というよりはむしろ、伝令に近い。

彼もシユウやその仲間と過ごしたいのだろう。時折中の方を窺いながら、アルノルに報告したのだった。

「サラ殿、よくお越しを！」

甲冑のすずを落としたアルノルは食堂に入り、皆に囲まれている女性に声をかけた。アルノルとサラは、騎士として一対一の模擬戦闘を練り広げた間柄だ。それ以降彼は、サラが十歳以上年下の女性であるにもかかわらず、深い敬意を抱いている。

「アルノルさん！ お久しぶりです」

サラの顔もばつと明るくなる。それだけで、男むさい官舎の食堂が華やく。そんなサラの横には、アルノルも初めて見る顔が並んでいた。

輝かんばかりの白髪を持つ色白で小柄な少女。

細身の長身で容姿端麗なエルフの男女。

そして、装飾の少ない質素に見えるドレスに身をまとった女性がいる。

この女性の周囲では、ざわめきが巻き起こっていた。

団内屈指の大食漢である数名の男と彼女は、どうやら食べ比べをしているようだ。その女性がすでに鶏の丸焼きを三個平らげているのに対し、団員たちはやっと二個目を終わるところらしい。

「……お騒がせしちゃってますね」

サラが困ったような笑顔で言う。

「なに、うちの者も皆嬉しそうで何よりです。それより、今日は？」

「ええっと、シユウ君が以前お願いした、竜の調査の件でなにか情報はないかって」

「ああ、そのことですね。今日ちょっとした噂話を聞き込んできました。シユウ殿は？」

するとサラは、少し寂しそうに視線を下げた。

「……鍛冶場にいますよ」

鍛冶場は鍛冶場で大賑わいだった。

シユウが、希望する団員の剣を研いでいるのだが、その出来映えがあまりに素晴らしいため、剣を愛してやまない騎士たちは、美しい女性で目の保養をするより、こちらに群がっているという訳だ。

「あ、団長。お帰りなさい！」

ガルが得意げに鼻をふくらませながら、アルノルを迎えた。

「こっちはなんの騒ぎだ？」

「実は——」



事のきっかけは、食堂にいた料理人とシユウの会話だったらしい。

「包丁がここのところうまく研ぎ上がらない」と愚痴をこぼしていた料理人に、「ちよつと研いでみましょうか」とシユウが話しかけたのだ。

「シユウ殿は鍛冶の心得が？」

「はい、短期間ですが鍛冶の里——デンザルで修業したことがあるんですよ」

「その若さで!？」

ゲーム時代に、学校の中間テストの期間、気晴らしとしてジョブチェンジしていたとはさすがに言えず、シユウは曖昧にうなずいて笑った。

この世界に送り込まれてから判明したことの一つに、ゲーム中に身に付けたスキルが自然と発動できる、というものがあつた。

だから、「サムライ」のスキルである乗馬がシユウにもこなせたとし、「ホーリーナイト聖騎士」であるサラの戦闘中の剣舞は凄まじいものになる。

半信半疑で見守る料理人の前で、官舎の鍛冶場を借り、シユウは包丁を研いで見せた。

——これは包丁+3くらいになったな……。

満足いく研ぎ上がりだったようだ。シユウは会心の笑顔で料理人に包丁を手渡す。



「……………これはすごい！」
料理人は刃を透かして見てから、自分の親指の爪に刃先を当て、切れ味を確認すると唸った。

よい包丁は軽く爪に当てただけでも、刃が引つかかる感じがする。まるで新品の時と変わらない——いや、それ以上の出来映えだった。

その光景を見ていたガルが、おずおずとシユウに頼み事をする。

「あの、実は……祖父の代まで家宝だった剣があつて……ちよほど隣国との国境争いの時代のものです、刃が歪んでしまつてるんですけど……」

シユウに直せるなら直して欲しい、ということらしい。

「うーん、ちよつと見てみないとわかんないな」

「すぐ持つてくるんで！」

その後、ガルの先輩たちもこの見物に加わった。

ガルが持つてきたお宝の剣を簡単に修復してしまつたシユウの腕前を目の当たりにして、ここまでの騒ぎになつたそうぞうだ。



「なるほど……しかしお前たち。シユウ殿は王の客人だぞ？ 侍従には来訪をお知らせしたんだろうな？」

「あつ」

アルノルの問いにガルが顔色を変えた。

「馬鹿者！」

アルノルの怒声に追われながら、ガルが慌てて鍛冶場を飛び出していく。

その声で、シユウもアルノルの帰りを悟った。

「お帰りなさい、アルノルさん。お邪魔してます」

「シユウ殿、なにやらご無礼をいたしましたようぞうで」

「とんでもないですよ。久々に鍛冶場で作業できて、僕も楽しいんですから」

シユウは本当にまんざらでもなさそうな表情で、すすと汗に汚れた顔を拭いた。

「ちよつと待つてください。この最後の一本仕上げちゃいますんで！」

シユウはそう言うのと立ち上がつて、手にした剣を一振りしてから砥石の前に座り直し、手際よく研ぎ始めた。

わずかでも魔法の素養がある者は、この瞬間に、シユウの体がかすかに光るのを感じて